

75回継続表彰

小川 瞳さん

ピアノを弾くことで、
いろんな感情を経験できたと思ひます

プロフィール：おがわひとみ◎ 1986年茨城県生まれ。ピティナ・ピアノコンペティションソロ部門（A2級～G級）、グランミューズ部門、デュオ部門、コンチェルト部門と幅広く参加。03年F級、04年コンチェルト上級、05年07年グランミューズYカテゴリー全国決勝大会入選。昨年8月の水戸ステップにて、75回継続表彰を受賞。幼少期から瀧塚順子先生、12歳より横山幸雄氏に師事。当協会学生会員。



「まさにピティナで育ってきたと思ひます。」と有り難い言葉をくれた小川瞳さん。1992年にコンペ初参加。その後コンペはほとんどの級を受験、ステップも29回と、ピティナ歴は、実に18年におよぶ。その中で特に思い出深いのは、モーツァルトの「戴冠式(26番)」を弾いたピアノ・コンチェルトの経験。アンサンブルの楽しさに目覚めたという。

「ずっとピアノを続けてきたので、今となつては、ピアノは切つても切り離せない存在。生活の一部ですね。ピアノを弾くことによつていろんな感情を経験してきたように思ひます。それは、作品を演奏すること、その作曲家の感情を疑似体験できるといふのもありますし、また練習のときの向上心、本番の緊張感、そして本番後の達成感だったり、ピアノを通して私自身がいろんな感情を味わつています。」何度も何度もステージに出たいと思ひるのは、練習過程を含めどの瞬間も真剣に取り組むことを重ねていきたいからだとか。

ステージ本番前に必ずすることはありますか？

「リハーサルなどの直前の練習で

年間スケジュールは？

- ・春～夏：コンペ参加
- ・秋～冬：ステップ参加

※コンチェルトステップに参加するのも楽しみ。

ソロ演奏会だけでなく、地元オケとのコンチェルトなど演奏の機会も多く、ステップはそのリハーサルとして参加することも多いとか。

は、必ず曲の出だしを弾いて終わるようにしています。出だしは特に緊張するので、その感覚を維持したまま、本番に臨めるようにするためです。あと、村上龍さんの『コインロッカー・ベイビーズ』という小説を持ち歩いてます。とてもエネルギーに満ち溢れた作品で、本番前にパワーをもらえるというとか。」

出るたび、 が好きになる 継続の秘訣～

そんな小川さんは、実はもうひとつの顔を持つ。小川さんの著書が2冊出版されているのだ。「儚き日常」と「幻想の箱」、いずれも繊細な感情をファンタジックに描いた作品。 「物心ついた頃からピアノと読書が大好きで、日本文学から海外ものまであらゆるものを読みあさっていました。物語や絵を書くのが大好きな子どもだったようです。」誰かに読まれることを考えていたわけでもなく、1人したためていた小説だが、周囲の薦めで出版することになったそう。ピアノと小説執筆は、自身の中で別ものとして両立させている様子。今年11月にはリサィタル、来年2月にはラフマニノフのコンチェルトと、大きな予定を控えている小川さん。これからの沢山のピティナのステージでお会いできそうです。



今野真衣さん

泣きたくなるほどの緊張とともに、
ステージのピアノ椅子に
座る瞬間が快感です

プロフィール: いまのまい◎ 1995年大阪府生まれ。A2級からD級まで毎年ピティナ・ピアノコンペティションに参加。06年連弾初級Bで全国決勝大会入選。09年D級地区本選優秀賞受賞。今年3月の千里北ステップにて65回継続表彰を受賞。二本柳奈津子先生、宮下直子先生に師事。現在、私立大阪学芸中等教育学校に通う中学3年。

この春、65回の継続表彰を受賞した今野真衣さんは、ピアノと学校が大好きな中学3年生だ。今回、北大阪ステーション代表の二本柳奈津子先生、お母様の今野万実先生とともに、インタビューに応じてくれた。

真衣さんは、年間10回ほどピティナのステージに参加。秋・冬の時期はその他のコンクールにも挑戦する。特に、この3月は毎週末ステージの機会があったという。ステージにのせるには、相当のエネルギーと練習時間が必要はず。ステージのどういふところが好きなのだろうか？

「本番の緊張感が好きなんです。演奏前は緊張のあまり、舞台袖で泣いてしまうこともあるけれど、その涙をふり払ってピアノの椅子に座る瞬間が快感というか…」と、何ともストイックでパワフルな二面を持ち

年間スケジュールは？

・1～5月: ステップ参加
(千里北・和歌山・堺泉北など)

・6～8月: コンペ参加
※ピティナのステージは年間10回ほど

秋～冬は、他コンクールにも参加している。

【新連載】Vol.1

ステージに ステージ ～ピアノ

合わせているようだ。本番の3日前になると、思い通りの仕上がりでなくとも、テンションが高まって、早く本番を迎えたいという。

数々のステージの中で、最も思い出深いステージは、小学校3年生のとき、ブルガリアでピアノコンチエルトを弾いたことだそう。あのととき真衣は本番中ずっと笑って弾いていました。何だか彼女が舞台でキラキラして見えたね。」と、お母様の万実先生は振り返る。

コンペやステップに参加するとき、他の参加者の演奏を「聴く」のも大好きだそう。皆の演奏について、アドバイザーのようにプログラムにコメントを書きこむことも楽しみのひとつ。最近は探究心も深まって、作曲家についてインターネットや本

で調べるようになった。「前はピアノという楽器が単純に好きだという気持ち。これからは自分自身や作品にもっと向き合いたいと最近思うようになった」と真衣さんのピアノに向かう姿勢も成長を見せ始めている。

これからのピアノの目標は？と聞くと、はにかみながら答えてくれた。「大好きなラフマニノフのピアノコンチエルト2番を、海外のステージで弾きたいです。もうひとつの目標は、ショパンエチュードを全曲制覇することです。特に好きなのは、Op.10と、『革命』と『木枯らし』

だそう。曲の好みにも、真衣さんの熱い気持ちがちらつと垣間見える。



▲左が二本柳奈津子先生(北大阪ステーション代表/千里北ステップ開催)、右が今野万実先生(堺泉北ステーション代表)とのスリーショット。



▲ブルガリアのコンチエルトのとき。中央が真衣さん。